

シーズンオフの別荘地は静かだった。

夏が過ぎさり、冬を迎えようとしている別荘地には、凝縮された享楽の雰囲気はない。

夜は静かで、夏の間の夢の名残りを、遠く闇の向こうへ押しやってしまっている。芝の広がる庭で開かれるようなガーデンパーティのはなやかな笑い声も、けたたましい嬌声もそこにはなかった。

あるのは、雨戸をたてひっそりとした無人の家並みで、音をたてるのは、山の下から吹きあげる風に、枝を触れあわす、葉をすっきり落とした木々だけだ。

男は静かな場所が好きだった。静かな場所にひとりで立ち、音のない空気に耳をすませ、あたりの匂いをかぐのが好きだった。

彼は今、誰も乗っていないジープのかたわらに立っていた。ジープはエンジンの唸りがかすかに震え、ヘッドライトが人影のない家々を照らしていた。

別荘地は、温泉町を見おろす山の中腹に沿ってあった。登ってくる山道はつづら折りで起伏も激しく、ときおり山のふもとを行く車の放つ光が、鋭い角度で夜空をよこぎつてい

った。だが今夜そこまで登ってきた車は、彼の乗ってきたジープ一台きりだった。

別荘地帯の入口には、小さな監視所がある。そこには年寄りの管理人がいて、あたりが雪に閉ざされてしまうまで暮らしているのだった。

男が立っているのは、山の頂上に向かっている舗装された山道で、平地と山頂のほぼ中間あたりの高さに位置し、最も別荘が多い丘につづいていて。そこまで来るとようやく、山道の傾斜はなだらかになり、道幅も広くなるのだ。

道の両側に立ちならぶ別荘の大半は個人の所有物だが、中にはいくつかの貸別荘もあった。男にとってはたいしたちがいではない。人のいない別荘地は、彼にとっては単なる仕事場であり、その静けさが彼を満足させた。

夏の別荘地にあるのは、短い季節の間に精いっぱい快楽をむさぼろうとする人間たちの欲望だけだ。年とともに、やってくる者の顔ぶれが変わるうとも、そこで彼らがわずかな時間に費す、金や無駄な努力は同じだった。何かから逃れるように、暑苦しい街からやってきたとしても、結局は再びそこに戻っていくことになるのだ。

男は長い時間、そこに佇んでいた。ただひっそりと、あたりの景色と同じように、動かず立っているだけだ。年は四十を幾つかこえたぐらいで、贅肉のつきはじめた体は、がっしりとしている。

顔だちは全体に優しく、目尻には笑い皺があった。その目はときおりあたりを見回したが、特に意識しているものはないようだった。火のついた煙草を、腰のあたりにたらし

大きな手にはさみ、立ち昇る煙がけむたいかのように目を細めている。

引退したスポーツ選手を思わせる大柄な体は、襟に毛皮のついたジャンパーで包まれていた。

見上げると、都会では見ることのできない澄んだ夜空に、溢れるほどの星が浮かんでいった。一年中で、最も美しい星空を眺められる時期なのだった。

彼は煙草をジープの灰皿で消し、エンジンとライトを切った。助手席から大型の懐中電灯をとりあげ、ベルトで肩から吊るす。

それから誰もいない別荘を見回すと、最も近い場所にある一軒に向けて歩き出した。懐中電灯はつけない。晴れた夜空には、充分道を辿れるだけの明るさがあった。

冷えた夜気が、彼の吐く息を白く変えた。

その別荘は白塗りの瀟洒な木造二階建てで、落ち葉の中に埋もれていた。山道からわずかに離れた斜面にあり、昇り坂になった階段が、おもちゃのようなポーチにつづいている。

階段は地面に短く切った丸太を埋めこんで作ったものだった。彼は階段を昇ると、戸口に立ち、懐中電灯を点した。

錠前の具合を見、同じようにフランス式の小窓におりた雨戸を調べる。錠前はきちんとかかっている、こじあけられたような跡はなかった。

男はその家をひと回りのりした。かさかさ乾いた落ち葉を踏みしめ、二階を見上げる。入念に、変わった様子がないことを確かめ、電灯を消し、元の山道に戻った。

彼は次の別荘に向かった。一軒一軒を丁寧に調べていく。どこもすべて無人で、異常はない。

やがて彼は駐めておいたジープにひきかえした。来たときと、何ひとつ別荘地に変化はなかった。

その夜の彼の仕事は、それですべて終わりだった。冷えの厳しい山で、寢床の調達を他人の家で果たそうとしたり、乾燥した空気と暖をとるための焚き火の関係について無頓着な人間がいなかどうかを確かめるのだ。

たまに、もう少し手癖の悪い手合いを相手にすることもあった。が、それとて、彼には重大な問題ではなかった。彼は、この仕事に気が入っているのだった。

男はジープで中の数本の煙草を灰にすると、車首を巡らせた。山道をゆっくり下っていく。

時刻は真夜中すぎで、その晩はもう、別荘地にやってくる者はいない筈だった。

いつ、どの別荘が利用されるかは、常に、前もって所有者または使用者によって、管理人を通じ、彼に連絡されていたのだ。

彼が実質的な管理を受けているのは、五十軒近い別荘だった。彼はそのすべての利用日程のリストを持っており、その夜は、うち二軒にしか人はいなかった。

その二軒のたつている地帯はもう見回ったあとだった。山のふもとの方の別荘地帯だ。山道を下っていった彼は、道に面した一軒の別荘の前で車を止めた。それは山小屋風に

造られた二階屋の建物で、横手にコンクリートをしいた駐車場を持つ別荘だった。そこに一台の車が駐まっていた。メタリックブラウンのトランザムで、一階の窓からもれる灯りが車体を鈍く照らしている。

前にそのあたりを見回ったときには、なかった車だった。

周囲の別荘はいずれも無人で、その別荘も今夜は誰も利用者がいないことになっていた。彼はジープを止めても、すぐにはおりなかった。座席の中で背すじをのぼし、じっとトランザムを見つめていた。

その別荘は個人の所有で、メタリックブラウンのトランザムが過去に駐まっているのを見たことはなかった。

やがて彼はジープのエンジンを切ると、おりた。別荘の木の扉は閉じていて、灯りがもれているのは、横手の窓におろされたブラインドのすきまごしだった。

彼は懐中電灯を点し、ダッシュボードからバインダー型のリストをとり出すと、その別荘の持ち主を調べた。持ち主は、横浜に住む、芸能プロダクションの社長だった。しかしその男が他にもあまり人にいえぬような副業を営んでいることを、彼は知っていた。

駐車場の入口には、鎖をはりわたした柱が立っている。車を入れるには、その柱をコンクリートの床から抜き、鎖をたるませるのだ。柱はがらんどうのステンレスで、たいした重さはない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。